

ミオヤの老

流轉の巻

前編

同胞衆に白す	一
光明生活と極樂往生との區別はいかゞ	一
本願力	三
隨眠煩惱	四

後編

十二因緣頌	七
無明	八
業	二三
識	三二
名色	四五

一りの大ミオヤを載く所の世の清き同胞衆に白す

我らが^{われら}大恩教主釋迦世尊^{だいにんきょうしゆじかぜそん}は身は人間に假て^か此世に出玉へども^{こよにいでたまへども}（御神は實は）^{ごしんはじつは}眞實法身^{しんじつぽうしん}は永恒常住の無量壽佛^{えいこうじやうじゆのむりやうじゆぶつ}に在ます。我らは煩惱の眼にて瞻むことはできざれども如來^{にょらい}は眞實法身は靈體に在ませり。今現に^{いまげん}此處に在ますけれども肉眼にては瞻むことはできぬ。けれども熱誠^{ねつじやう}に大慈の父を御慕ひ申して慈眼に接したいと思ふて、一ら身命も惜ます念じ申してあらば大悲のミオヤは其心眼の前に現はれて爲に御法を説いて聞かして我はいつも汝が前に在りて離れぬ、汝は我を頼みにして安かれと御示し下さると明かされてませば、何時も今現に^{いまげん}此處に在すことを信じて聖旨に合ふやうに心をミオヤの聖胸を安んじ奉つるやうに心がくるこそ眞の孝心と云ふべきである。

（問）光明生活と極樂往生との區別はいかゞ

（答）極樂に生るゝと光明の生活は實は同一である。極樂は彌陀光明の實現したる御國である。光明生活に入るに此に二位あり。精神の生れ更りと身體の生れ更りとである。

（問）精神の生れ更りとはいかゞ。

（答）生れたまふの心は闇黒の生活なので、只肉のみを重く想ふて靈の方はまだ開けぬ。そこで信心念佛に依りて心が生れ更る時は肉體は有りながら心は彌陀の光明中の人と爲る。即ち精神的に極樂に生れ更つたのである。

（問）肉體の生れ更りとはいかゞ。

（答）前の精神が生れ更りて光明の人と爲りたるも身體は矢張り自然の寒熱飢渴等の苦は免れぬ。彌々肉體の命終つた後は全く光明の實現したる淨土の生活となる

（問）光明生活に如何なる徳あるか。

（答）共徳無量である。今二種の徳を擧ぐれば、一に最上の幸福。二に最高徳。

（問）最幸福とは如何。

（答）天然の人は只肉の幸福計りを追求めてあるも實際として價値はない。精神に入つて見れば憂悲苦惱のみ多い。其精神が彌陀の光明を獲て心が眞に救濟を得る時は心が生れ更りて心廣く體肝に狭き間き所より曠き恢廓曠蕩にして天地も一變したかのやうに感じられ信心開けて心生れ更りて後其前を顧れば闇夜より夜が明けたかの如くに感じられ眞に身は娑婆に在りても神は淨土に逍遙する想あり。現世に於て精神的に無上の幸福を感じられ未來は淨土に於て無限の靈福を受くるものと信ず。是光明生活の最幸福の方面である。最高徳を得るとは已に精神が救はれた上は現在の精神生活の目的はミオヤの聖旨を己が意として光明中の活動として道徳的の行爲を以て佛子の天職を果す爲に菩薩の萬行を力を盡して努力す。（以下斷絶同一内容の全文は既刊）

本願力

法爾とは如來の自然性が常に一切を開化度脱するの性能、譬へば太陽の力が地上の生物に及ぼす是太陽の自然性能なるが如く、靈界の太陽は常恒法爾として度生の光を一切衆生に與へつゝあり。

本願力とは報應の佛の願力とは誓を以て衆生を（ ）なれども本有常住佛の終局目的を應佛の願力と云ふ。

法佛が如來自性より出でたる衆生なれば相待の方面を脱して自性に攝取せんとの目的。

人間に云はゞ親が子に對して父と同格にして所有を與へんとするが父が子に對する望なり、之を願力と云ふ。

隨眠煩惱

罪惡の種子を煩惱と云ふ。煩惱に種子と現行とあり。種子は伏して居るが、機會があれば忽ち現行を犯すことに成るのである。

罪惡に種子と現行とありて、假令未だ現行に至らずとも、已に凡夫の心には罪惡の種子が伏藏して居る故に、決して凡夫の心は善ではなく只肉の動物性の罪惡我が表向きの主人と爲りて、最高等なる靈性は最深の奥室に閉ぢ込められて居て、毫も生活には關係することができぬため、天然の人に伏在する靈性は、卵子の中の鶏みたやうに、未だ伏能となりて、頓て隨從すべき動物性が代りて主人と爲つて居る。

いかに罪惡の種子が伏藏することを認めんも此凡夫心に伏在して、場合あれば顯動する心の働きを隨眠煩惱と名づく。隨眠とは始終腦髓中に隨うて眠伏して居ると云ふ義である。此に二十あり、今其の中一、二を擧ぐれば、一に忿、恰も蠅蟻や百足の類が凡夫の胸の裡に潜在して居り、若しも此に刺戟を與れば、忽ちに喰いつくのであるされば經に煩惱の毒蛇が眠つて汝が胸に在りと示され、忿と云ふ煩惱は胸裡に在りて若し人が或は惡口、または他の刺戟を與ふると、忽ちに紅の炎を吐いて恐ろしき牙

をひき出して喰ひつかうとする。恨。私には貴君に對して何の恨みもないと申しても或事情の爲には人を恨み、甚だしきは他人を殺害せんと云ふやうな煩惱が胸中に眠つて居る。(斷絶)

後篇

十二因緣頌 (未定稿)

因緣

世界一切生物の	世に生存の因緣は
大は天界一切の	星宿世界を觀じても
因緣互の關係は	網狀をなしてつらなれり
因果互の關聯は	鎖となりてつながれり
横に空間を盡して	豎に時間を徹しては
因緣因果の相關は	永遠かはることぞなき
生物	因とは法身自然の性……空自の所原文文字無し

一切衆生の本性に
 人の性に十界の
 生物原始の幼少なる
 因とは自己の本能が
 種々に變化の機能なり
 資助刺激の助により
 具有せる性能なり
 迷悟十界具有せり
 微蟲の性にも具備せる
 外界の刺激に應じては
 縁とは外部より内性
 因の種性を成せしむ

應化の理法
 因縁相應を適存勝生

自己を分て遺傳

無明

法身藏性の一分たり
 此靈即ち生命のこと
 本來生は小造化
 如來藏性と一にして
 此靈妙の心性が
 法性の海に立つ浪
 下等物より生命は
 小自治體を(自)は
 生物生命の源を
 化合になれる元形質に
 酸化は吸入活動
 消化と分殖作用
 同化し新陳し増長す
 進化の五則は生物が
 生存競争し
 種々に
 心性靈力本來有し
 一(個)の小(極)の力
 此元力生命の(波)
 アラヤの識浪に
 法界と本一にて
 この生の()……註原文文字無し
 進化の一體の波
 一大()と調和して……註原文文字無し
 炭酸窒水の精妙
 酸化と彈撥力
 彈力消耗の()
 榮養は外物を攝取
 分殖作用は身()
 分殖數多に分れては
 物質自然に變化す
 外界の縁に感應し

無明(アラヤの相を無明)

衆生生理の(素)心を
 生物原始の本能を
 活きんと欲する氣味あり
 實に微粒の()には
 バクテリアにさへ無明あり
 己身を營む欲と
 云少微々の蟲よりも
 通じて己を營む力あり
 己を食はんとする
 理性の力に(よる)ならず
 己を營む欲は
 防禦威()は瞋と成り
 此三毒の煩惱は
 生物漸次に進化して
 人も初めて胎内に
 三毒の形式は有するを
 人も初意思とは
 理性は本々具はれど
 意志を無明と云
 生物不識の意志に
 無明即ち生衝動
 バクテリアの心より
 無明盲動の心と云ふ
 動植に分れえぬ
 彼が本能に具はれる
 また生理防禦の威力
 乃至すべての動物に
 力のあらんかぎり己を養
 物を防禦避遁の氣あり
 不識盲動の氣あるのみ
 す、みて人の貪となり
 盲動心は痴のはじめ
 原始の微蟲に本づけり
 やどりし精蟲の時にも
 始めには不識より意識にすすみて
 伏能にして開かぬを

兒生れて不識的
漸次初めに他の感
内に種子は有すれど
未だ感理の二性顯動せじ
初め感覺發展し
次に感情發達し
理性意志を有すれども
未だ開かねば不識的
性能具するも伏在し
聖中聖たる佛たる
生理の煩惱に覆はれて
三毒五欲に驅役され
凡夫生理の肉の心によりて
衝動するは無明なり

人に天性理性靈性の三階

天性は動物共通の性
天性中心の人は
（ ）
彼等四肢五體ある
彼動物の共通の
生理の（ ）
榮養生殖を目的として
進みて理性發達し
理我が自己の生理慾
動物欲を抑制し
人道に基づく生活を
この人の理性開く故
自ら制して自己の
下等の意志を制裁す
道徳法律をなはりて
人道全きを
自覺し自己を指導し
達する精神は具はれど
人は永遠不滅なる
靈我のいまだ展せず
之を開けば本覺
佛性本來具有せば
無量光壽の我なるを
悟らで大我の一分たる
理性を中心本位とし
自己の本源天眞の

眞理の光に迷へるを
また無明と云なり
自己の根底開展し
本來永恒自（ ）なる
無量光壽と合一し
永恒の光を得る人は
無明の夜
（永遠）の曉となりて
無明は生理衝動
惑性即ち煩惱を
本能不識の意（氣）に
伏せる意識が發展し
例ば種子胚（ ）より
（ ）を萌す如くにて……註——原文文字無し
因果に關き無明

一切生物の生理には
一定したる條理あり
たとへば生理の自然は
天則に規定せられ（ ）
一切千差萬別複雑の
極まりなき萬物に
一貫したる定理あり
すべての條理は悉く
因縁因果となれるなり
此因果の理法に關ければ
無明と云ふ
無明の（ ）の生物に
善惡邪惡の一切の
本性能生物氣に
無數の理性に具はりて
外界刺戟の緣により
無數の理性に具する一切の
無明即ち生死の本因（と）
此の因性に具有する一切の
種性の種が緣により
無數生物と發展す
混沌一素は無明なり
此一元素胚胎して
無數の生物の類と（展）す
種々に分類變化して
生物世界に分布せる
無明の心に善惡の
因縁に六道と

無數衆生と現はれぬ

此因縁は中々に

なれども一貫せる條理

生物學

此土に生ぜし生物の
生物學に隨へば
炭素は精妙物にして
酸窒水素の精
元形質に二用あり
酸化は酸を吸葉し
消化と分殖あり
自己の體に同化せり
増長極めて分殖す

複雑きはまりなければ

因縁因果は定まれり。

生命の理を説かんには
物の生命なるものは
變化に富みて彈力
化合を元形質と云
酸化と彈力となり
彈撥しては消耗す
消化は物を攝取して
補養成長の用なり
即ち生殖作用なり

無明

空界蒼々かぎりなく

時間空間超えにける

太陽系に繋れる

地球は宇宙の無限なる

我等此地に生を受け

一に數へらるゝ我にして

生物原始の當時より

世を経たること數もなく

たとひ無量の代を経て

生物の心に一系の

三際端もなかるべし

盡法界の

此地に生を受し身の

海に立ちたる泡のごと

幾億無數の生物の

實に果敢なき極みなれ

乃至人類に至るまで

進化の階級きはみなく

種類はいかにかはるとも

綿々として續かれる

一六

中心精()斷間なく

衆生(出)生の原心は

生物原始のアメーバに

理には如來法身の

佛性具有は理のみにて

活きんと欲する氣味あるを

微粒(單)素の微()には

微粒に有する無明より

己を營む欲性と

微の虫よりも

己を養ひ敵を防ぐ

不識にあれどもおのづから

幼稚微虫に具はれる

意識的なる人類に

己を營む職分は

敵に對する防禦は

生理衝動と盲動を

此三毒の煩惱は

進みて人となりてより

人も始めて胎内に

生理衝動具する故

生理の欲が母胎にて

小兒生れて始には

初めに感覺發しては

生物生命()の系

無明即ち生理衝動

有する精神生命を

性より分れし性を具し

無明の盲に生命を

無明生理の根本を

いまだ動植物と分たぬを

彼の本能に具はれる

また自衛防禦の能力あり

乃至すべての動物に

防禦に避難のつとめあり

生活の衝動を心とせり

生理の欲を()みては

益々我欲發展し

すゝみて貪欲となり

瞋恚となりて現はれぬ

人の愚痴とはなりにけり

原始の微虫に具はりて

いよゝ意識に發展す

宿れる精虫にも

即ち三毒の種子あり

養はれては産みにけり

不識の意思に

漸次に感情發達し

一八

一七

一九

理性の意志は人の	成熟したる時にあり
人の性たる理性	具すれどいまだ幼稚なり
兒には潜伏態にして	生理の自然に活動す
小兒は無明の中にして	夢の中なる夢なれや
人に天と理と靈の	三性己に具れり
天性は感覺	生物生理の欲なれば
動物共通性にして	生物界にわたるなり
理性いまだ發せずば	唯性慾に驅られては
自己の欲のみにして	盲從するより甚し
他の動物の本能に	我性慾を貪らば
意識的に利用して	無明の中の惡なれや
害他妄他の所爲こそ	自ら修めて自らの
人道照す理性にて	動物意志を御（ ）し
生理の欲を抑制し	秩序を正しく行ひて
人類としての道徳の	己を照して理性にて
常識の良心を中心	精神の奥の靈性の
人道の明るき人にも	小我の迷智に惑ふなり
光がいまだ發せずば
無明は生理衝動は	感性即ち煩惱の
自然不識の意氣にして	無明心に一切の
善惡邪正十界	三千性相具備せり
例へば植物の種子に	胚に有せる性分あり

水熱の縁に資けられ	萌して根莖なすごとく
無明の心に生物に	善惡邪正一切の
本性能を具備しては	無數の性相備はりぬ
外界の縁にたすけられ	種々に顯動し
無明生理の衝動の	微粒の生に一切の
無數の種性具はりて	外部の縁に應化して
混沌一素の無明なる	一素に胚（ ）性分が
外部の縁に資けられ	種々に分類變化して
世界に布ける一切の	生物界と現はれき
一切生の理には	一定したる條理あり
例へば生理の自然には	天則に規定せらるれど
千差萬別複雑し	極りなき萬物に
一貫したる條理あり	すべての條理は悉く
因縁因果と規定せり	本來自然の理法を
さりともしらで	無明と云けれ

業

生理的

サニタウ氏 筋を強大にせんには局部に向つて充分なる注意を集むるを要す、徒に運動するも決して筋を強大ならしむる效なし。

一定局部を強大にする爲に營養物を信ず、養分は血液受供す（血量）注意は血量を増すは精神條件なり。

凡ての感覺機の練習に於て然り、親には注意して物を見

注意が血量増加の精神條件なり、一の感覺機、血量加れば榮養が其神經發達

其局部を使用すると共に注意を凝集す

血量増加伴生緊張の感

感覺的對象の注意感覺血増

生理的に活動

業 (アラヤの勢力を業と云ふ)

煩惱即ち生理衝動の
 自ら活動する力
 此衝動が因縁に
 (一)力を業と云ふ
 自動の性ありて
 生理盲性力業か
 此活動は生理に
 例へば身體の方にも
 其活動の動機には
 或は雌雄淘汰
 永く活動休止する分は
 人の身體機能には
 活用ながく廢せるは
 生理の縁に規定られ
 業は生存競争の
 外部の刺戟に克たんとて
 生物原始の蠕動の
 ことに活動止まなく
 身命賭しての戦争に
 己に有せる業力が
 種々の方面に向つて
 地上に分布の生物が
 煩惱心に衝動に
 あるを業と云ふ
 随ひ種々に發展す
 (一)活潑に
 自己の生に適する
 自發自動に展す
 順應する方に發達す
 活動すれば發達す
 種々の因縁多し
 また自然淘汰
 機能つひに敗亡す
 累代使用せざる爲に
 不隨意筋肉の類なり
 使用する機は發達す
 戰場に立ち健闘し
 ますく活動してすむ
 當時も既に競争の
 自己勝たざれば敗死す
 互に進化の因縁は
 外界の縁に順應し
 向上進化し
 種類數なく發達して

二四

二五

程度も階級幾品あり
 生理衝動業動の
 外部身體種類のごと
 種々に分れし品類が
 無明衆生の心識に
 性能本自具すれども
 活動つよき方面に
 身體機能の部分が
 他へばアルコール性が
 屢すれば其機能が
 感ずる性がなき故に
 すべて五欲の官能は
 蓄財ますく進むとき
 肉欲我欲の は
 たとひ好まぬ業とても
 性が變じて好となる
 人の心機は善惡の
 屢作業を積む時は
 惡も轉じて善となり
 心機が種々に變ずるは
 因縁業作の縁により
 自性に善にも惡にも
 また外界の機會にも
 因縁作業六道の
 因縁かぎりあらざりき
 内の生活心意の
 いかでか數へ盡すべき
 惡善邪正六道の
 (一)善惡いづれにか
 まさりて發達することは
 用不に發達することし
 感覺性を刺戟して
 麻痺して量を増さざれば
 己に(一)進むごと
 屢すれば發達す
 いやく趣味を感ずごと
 積るにつけて進むなり
 屢すればいつしかに
 作業はすべて作爲よりも
 習慣つひに性となり
 善も變じて惡と化す
 即ち阿頼耶の異熟性
 種々に變じて順應す
 増長すべき因ありて
 種々に應化の能力あり
 身心土を作るなり

二六

二七

(原文文字無し)

自動業力のびく／＼て
されど外縁のあらざれば

増長すべき性能あり
自ら獨り作さぬなり

業力六道をなす因縁

人の天性感覺

自然の生理を管みて

天性のみの肉性は

劣神にして業力は

たとへば形は人たるも

其心業は畜類と

彼の畜類の生物は

禽獸昆虫の類までも

階級無數に分つとも

只天性の心にて

自の本能に規定され

種々の作業をなすなり

心愚かに天性に

稟性の氣に驅られて

虎狼の横暴業や

禽（）の猥褻や

本能のまゝにして

善惡何れとも發達せず

畜類の本能のまゝなるに

生れしまゝの劣態は

人は全體高等の

理性十分發達し

理性の光は肉による

すべての心性みちびきて

正しき人道進むべき

責任あるを無視して

向上業爲の遂げざるは

是畜類の業をかし

鬼道に九種の種類あり

中に三種を分たば

肉慾我慾が天性の

上にもまゝ／＼發達し

飲食男女の欲なるが

本より身の規定なるものを

生理の目的なるものを

無明の惑に惑はされ

慾を貪る感より

壓爲せば習性が

抗進つひに性となり

いよ／＼肉慾の奴隸となり

つひに五欲が物的（と）

即ち無財の餓鬼となり

五慾に飢えて

いつも飽くことを知らざるなり

多財餓鬼とは我慾にて

財寶積んで山を爲し

なほ飽かず

いよ／＼我慾つのは

我慾の爲に他の人に

害を與へて

つひに我慾の病と

有財餓鬼

勢力鬼とは世の中に

名譽權位などの

我慾の爲に世の人に

増まれてまでも

我慾深くはおのづから

嫉妬の心も深くして

たとひいかほど名譽位置

財寶積むとも

心と業は餓鬼道の

區に入ることあはれなり

アラヤの業力は

一切の物質元素を（吸）入し

業力不思議の模型にて

種々生死進化す

たとひ個人も日々に

新陳代謝の物質

.....

無明の微粒生が進み來て

人類とまで

無明の心に伏藏す本性

發展したる結果なり

この發展が即ち業努力なり

微粒の生が

先天に有せし伏能啓發し

生々世々の努力より

進み／＼て生（命）に

自己の力のある限り

外界の縁を頼みては

生存競争の力

本來性に向上の

心性あれば縁力に

助けられて伏藏を

啓發しては向上し

元始の生も内心に
生理衝動は自己の
盲進突貫して

活氣()を衝機
生命を向上せん
無明と業と()

識

生は自己の衝動に
種々の外縁を藉りて
一個の自治に統べられて

己を益する方に發展
自己を作るを業と云ふ

自己一切の身心を
即ち自我の

統一自治を識と云

識心本來有覆無記の
善惡邪正何れにも

善惡定相なければども
隨業變化の能ありて

六道種々に業力の
習慣性をなす時は

力によりて六道の
無記異熟アラヤ識

隨業轉變定めなく
心の自性の因種に

自性を維持して
遺傳と展()し

世を轉しても等流して
生理の理法にも自己の爲す

習慣性を造りては
遺傳と云ふ

己の性を子に譲り
されども自己は外部なる

縁を待たずば成らざれば
異性に熟するを異熟識

隨縁順應の力より
植物に果實に熟すれば

全部の種子を有すること
性相體力悉く

自己の身體に精神の
精(子)と(卵)子の性能に

尅識して傳ふなり

么少微虫の()より
階級を通じて
されば有爲の()
人類に至るまで

自らゆる力をつくしては
最も(高)き人類と
累代敵に打ちかちて
競争場裡に勝をう

四股五官身體の
自我統一の識神に
生物進化の目的は
明に向うて進化せり

植物内の生活は動物に
理性の明を期待せり
爾れは人は萬物に
如來にうけし識心の
(まこと)開きてある限り
眞善善妙に向つて
人はすべての生物に
識とは自我にて人格の
すゝめよすゝめいや進め
神の秘めたる如來藏
腦に藏せる靈光に
世を文明の華と

高等なる人類
自己性相傳るは
生物原始の()より
生存競争場裡に
鬭争勝利を得るもの
群を抜いて向上し
勇猛努力の結果なる
業力
全部の力は悉く
尅識してそ(結)果()
無明の闇黒の性より
動物よりは人類と
すぐれて明き識心
深く伏在せる性を
身心ともにいや變じ
發展せるべし
抜いて職責重かりし
全部を統一する力
我等が腦髓の奥に
無限の財源藏あり
何くらふべきぞ
腦に藏せる心識の

三三

光を發して明くせよ

三六

人の命の終には

初に境界愛おこり

妻子親族より

我所有の執心來りしも

執心愛着するほどに

次の末那の我分別より

全く此身は我有なりと

執着

夢境の如くに當生の

當に受くべき道は

道を六に分るには

或は極重惡人の

熱炎燒煮る如くにて

清涼風を慕ひしに

悦び進みこれに投ずれば

炎と化して身を燒かる

薪を重ねては

或は餓鬼畜人天の

人の因果の小車は

人と生れし(は)

六親つどひ悲みの

三種の愛心發動す

五識の燈消えぬほど

乃至家屋家具など

永き別れせまるに

五識の燈消ぬ()

自身の體を愛念す

執し來りし此の體の

いよ／＼已に意識も失ひて

境界現前

各自業識尅果せば

當に終に斷末摩

しのび難きにたゞねがふ

清涼の池現はれぬ

水と見へしは急ちに

自ら造りし惡業の

業火に燒かるゝいたましや

己が業に牽かれては

代るものは有らめやは

當に終りに臨む時

泣き聲だにも聞えざる

三八

中有の境はあらはれぬ

愛の縁にひかれては

此身を離れし刹那

三種愛心は

因縁等流の縁により

父母の許に托たりや

生理遺傳

たとへば同胞五人の

五人ともに相似の中に

いかなる形而上の縁

因縁果報の法則を

されば妊娠當時の三月の

其身心に尅識し

精子卵子に等流して

されば人の父母たる人々は

自己の形氣を子に傳ふ

子々孫々に綿々と

()川の流れ／＼て()

水に含みていくばくの

代々の氣質を混しては

近くは父母の元質を

()人々精神を高く

天に在す大ミオヤの

智徳のともに修養し

聞のふすまもうつろひて

識はかしこに()

當生にいたるなり

刹那の念()

福分強きは富める家の

同じ父母の模型にて

各自の性相異なるは

されど自然の法則は

逸して外にあらざらん

父母の心意の善惡は

(精)子(其)氣を結び(尅)ては

胎兒の意()を遺傳ふ

自ら常に蕭みて

其利害は自己に止らず

流るれば

其水源の土質をば

兒に傳へしかしらす

直ちに傳ふ

清きみむねを傳ふべし

人格高く形成せよ

人格高く形成せよ

三七

三九

人生業力の

結ひて終身作(一)

己が神に尅したる

進化の階級すゝむべき

生(一)を向上せしむるは

己が神を開展し

精(一)を濁して

この地に(一)し人類に

精神ともに明けく

天に對し人類に

結果は自己の識心に

作すことなすこと悉く

人格は天に對する職にして

其子に形氣を傳へて

人に報するつとめなり

天に報する行なきは

子々孫々に及すは

(一)罪は免れず

また(一)におつべし

對して責任重きなり

即ち物質を召集

一大心靈の窓と聯れば

窓を閉づれば死

識は轉じて

即ち是れ我等なり

識の生息止まず

是身體生活止めども

一切唯心の

宇宙一大心なる

一分なりし衆生心

衆生海は無邊なり

衆生世界は浪なり

後際きはなく生々し

すべての生物の小造物

有する心の生命

この心宇宙の一大心と

人生の波は古より

生住異滅新陳し

心性物質を身として

最下等の生より

無數の段階經たりしも

生命一體の理より

此小自治體の

地上に出し生物の

此の生衝機と

理法に

法身如來藏性の

衆生は心を以て本とせり

無邊の海に立ちさはぐ

生物元始の始より

此小極の生物に

この力にて自己を造り

連りて

古今互に往來し

代謝し(一)

生命一體の波

最高等の人生に至るまで

進み進みて

元始生物にも生命あれば活氣あり

斯理衝動

識

靈魂不滅

靈は物質(己)上の實在

宇宙に消滅するものなし

吾人の腦に宿れる精神の

自己の靈を顧みよ

物質は七年にして一變

靈去れば物質は腐敗す

物を集む(一)なり

識アラヤは永劫の海にして

物質集めて活動し

業力の膏盡くれは

物質不滅勢力永存

力の上の力

靈何ぞ滅すべき

元理は永劫不滅なり

此身は天地の一部なり

我てふ意識は變りしを

識は物質己上にて

我は立ちたる浪なれや

油盡くれは

識はまた形を變へて活動す

生を欲する気分なり
 内より發して盲進し
 内より衝きて發するに
 衝動かなふは樂ならん
 生理の自然に具りて
 生命保存の本能は
 生命危機に怖畏性
 食と眠との欲あり
 生命保存の本能は
 生命危機に怖畏性
 原始ふ小の生にも
 單細胞の生物より
 複細胞にすゝみては
 水母脊桂陸棲哺乳
 進みすゝみて人類と
 太初の生命の一の微粒より進みて無核()となり
 自ら繁殖して
 それは一個が二個となり
 分殖して二個が四個
 一切生物の身體は
 此の微粒の結合
 禽獸魚竜別つれど
 唯細胞の結合
 原始生より無數の階
 人となり
 有核となれる核に
 生命に宿るなり

人に色心二面あり
 外的生活の身體と
 内的生の精神と
 この色心の両面は
 (一)にして異異にして(一)
 不離の關係
 或は一體兩面を
 色心と名けしぞ
 されども身は質碍
 心は無碍にて
 識心母胎に宿るとき
 識は名ありて形なし
 質元の身と合ふときを
 名色とは名づくなり

識に福德強ければ
 精子の元質は
 たとひ偉人の元質にも
 毫も異點は發見せじ
 この細胞の伏藏する
 伏藏しては漸々に
 生物原始の微粒より
 無數の時と量りなき
 無數の世代と階級を
 進みくゝていと高き
 動物人の類より
 無數の代と時間とに
 人の兒は胎内十月に
 進化の階級經歷して
 名とは識神一切の
 色とは父母の遺體
 名は陽精の神にして
 陰陽合して人となり
 之を精神と云ふ

應じて()
 單細胞の精子は
 生物原始のアメーバと
 されども不思議は
 身心性能悉く
 無數の時間を経るほどに
 生物進化の階級は
 外部の縁に資けられ
 經歷しては漸々に
 人類と原始人を進化して
 ()開化の人として
 進みしものをくりかへし
 生物の
 人の兒として産るなり
 一切の心(理)を藏せる
 色は陰精の質なり
 活動の力あり

昭和五年十月廿八日 印刷
 昭和五年十月三十日 發行
 編輯者 山崎 辨成
 發行人 東京市小石川區小日向町三丁目
 印刷人 春山 治部左衛門
 牛込區早稲田町四〇三
 印刷所 小林印刷所
 東京市小石川區水碓橋二丁目四十四番地
 ミオヤのひかり社
 掛巻口座東京六八五一番